1. 船員の死亡率について

目　　次

(1) まえがき…… 2
(2) 船員の死亡率の推移…… 2
(3) 年令階層別にみた死亡率…… 4
(4) 死亡原因について…… 6
(5) 死亡の季節的変動…… 7
(6) むすび…… 7

1. まえがき

船舶の自動化を伴う技術革新は，世界的風潮として急速に海運界をゆり動かしている。それによって船内労働は急テンポで変容しつつある。そしてこれに対応する労働力の確保が重要な課題となってきた。

去る7月31日運輸省は省令を以って，船員労働安全衛生規則を公布し，10月1日から施行することとした。また本年3月には船員労働災害防止協会が発足して，去る昭和33年設立された日本海難防止協会の活動と相まって，船員の生命を守るための体制の強化がすすめられ，その成果が大いに期待されることになった。

この時に当り，船員の災害および疾病による死亡の実態を明かにし，海上労働の問題点をさぐり，対策を考えるための参考にしたい。ここで対象とする船員は，船員保険の被保険者で，毎年の実数は表1の通りである。

2. 船員の死亡率の推移

船員の死亡率の推移を社会保険庁の船員保険に関する資料に基き，1956～1962年について作図してみると図1の通りである。死亡人員数は表2の通りで年に1,200名をこえる多数に上っ

表1 対象船員数

	汽　船	機帆船	漁　船	計
1956	56,620	26,662	94,859	178,141
1957	64,093	26,687	99,253	192,033
1958	68,392	29,815	102,243	200,450
1959	71,152	29,777	106,901	207,830
1960	75,874	30,792	109,707	216,373
1961	81,886	29,626	111,519	223,031
1962	85,624	30,682	113,693	229,999

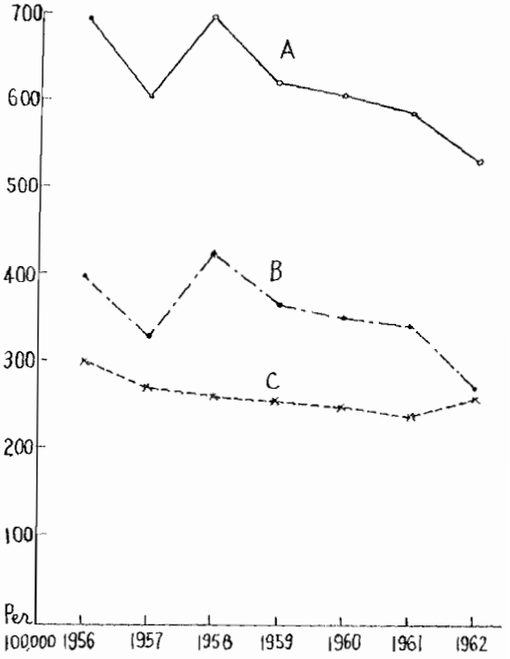

図1 船員の死亡率
A．合計　B．職務上　C．職務外

表2 死亡船員数

	汽　船	機帆船	漁　船	計
1956				1,225
1957	278	243	636	1,157
1958	300	222	859	1,381
1959	213	223	852	1,288
1960	226	211	867	1,304
1961	273	198	826	1,297
1962	331	198	693	1,222

ている。これは10万対でみると1956年の688から，1962年は531となってやや減少の傾向にある。

その減少の原因が職務上の死亡，主として海難による死亡の減少によるものであることは図に示す通りである。すなわち海難による死亡は，実数では大きく変らないが，10万対ではかなり改善のあとがみえる。一方職務外の死亡は横ばい状態で減少の傾向がみられない。むしろ増加の気配さえ見られる。

船員の死亡率を他の産業の労働者と比較することは，年令構成のちがい，その他いろいろ困難な条件があるが1956年の厚生省の職業別，産業別死亡統計によって作図してみると図2の通りである。この種の統計は，これ以後新しいものが出されていないので，1956年の資料で比較を試みた。農林漁業は年令構成の上で他の産業と異るので比較は困難である。その他の職業についてみると，船員は採鉱採石業の労働者に次いで高い死亡率を示していることがわかる。陸上の交通労働者の代表として，国鉄の従業員をとってみると1956年の死亡率144でこれは船員の約1/5に当る。若い壮健な集団である船員の死亡率がいかに高いかがわかる。すなわち，海上労働は今なお危険率の高い職場であるといわなければならない。

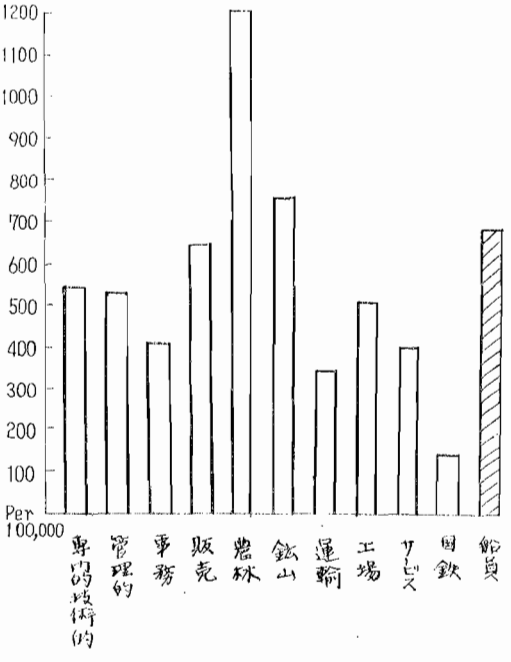

図 2　各種産業労働者の死亡率（1956）

船員の中には汽船，漁船，機帆船の別があって，労働の面からみてもかなり大きな差がある。そこで死亡率についてそれぞれ別に推移をみると図3の通りである。漁船船員の死亡率がもっとも高く，1958年には10万対で841の高率を示したが，1962年には610に下ったがそれでも比率は高い。これに次ぐのは機帆船で，1957年の847の最高率が1962年には646と低下した。

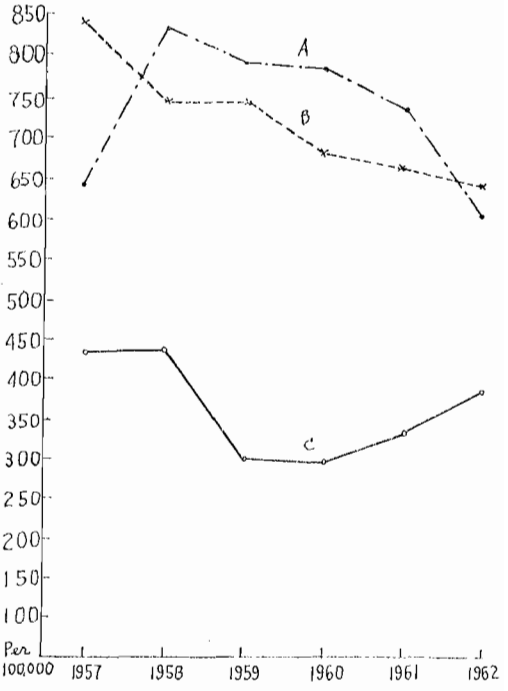

図 3　船種別死亡率

A．漁船　B．機帆船　C．汽船

漁船，機帆船と汽船とでは図でみるように死亡率に格段の差がある。漁船，機帆船とも近年減少傾向にあるのに，汽船にあっては，1959年の300 を最低として，以後だんだん増勢に転じ，1962年には387になった。漁船，機帆船に比べて，あらゆる面で進んでいる筈の汽船においてなぜ死亡率が増加傾向に当るのであろうか。その原因は図4でみるように，漁船，機帆船の職務上の死亡率が減少の傾向にあるのに，汽船船員の職務上の死亡率が増加傾向にあるためである。

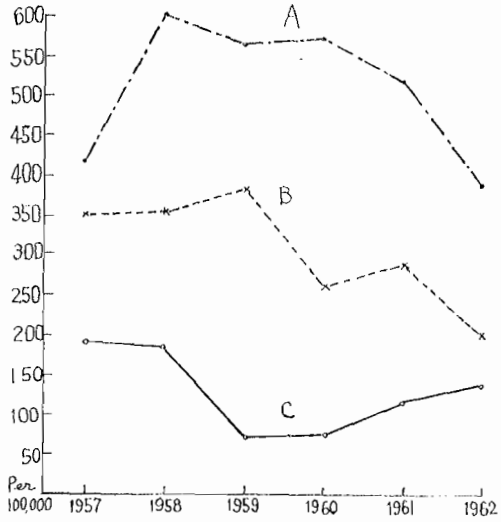

図 4　船種別職務上死亡率
A．漁船　B．機帆船　C．汽船

る。職務上の死亡率は漁船がもっとも高く，機帆船がこれに次ぎ，汽船がもっとも低率である。職務上の死亡率は海難による死亡が大きな部分を占めているので，図4はそれぞれの船種の海難発生比率を示すものとみてよいであろう。海難の発生率は船型の大きさに大きく影響されている。漁船の海難が多いのは，小型船で遠洋まで出漁するためであり，機帆船の場合は強度の弱い木造船であるためである。

そこでそれぞれの船種について，海難発生数

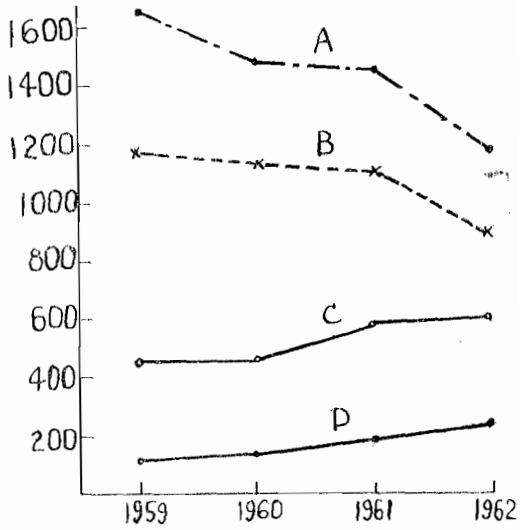

図 5　船種別海難事故数の推移
A．漁船　B．機帆船　C．汽船　D．小型鋼船

の推移をみると図5の通りである。漁船，機帆船は近年漸減の傾向にあるが，汽船だけは，増加の傾向にある。汽船船員の職務上死亡率の増加はこれと対応している。汽船の中で沿岸のみを航行する500トン以下の小型鋼船の建造が近年いちぢるしく増加し，船舶の性能，船員の能力，交通の輻そう，経営の弱体などいろいろな要因が重って海難がひん発し，防止対策がつよく叫ばれているが，経営基ばんの弱い地方的な群小企業のため徹底を欠いて実効が上らない実状にある。

職務外死亡率についてみると図6の通りで職務上死亡率とはかなり異っている。汽船船員と漁船船員は10万対220前後で大差がないが，機帆船船員では400をこえる高率を示し，健康状態の特によくないことを示している。

3.　年令階層別にみた死亡率

年令階層別に船員の死亡率をみると図7の通りである。これを国民（男）と比べるとかなり

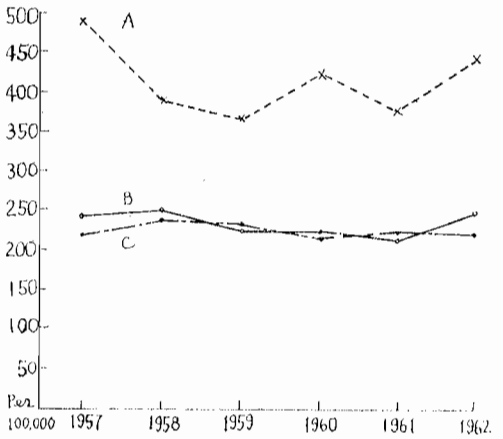

図 6　船種別職務外死亡率
A．機帆船　B．汽船　C．漁船

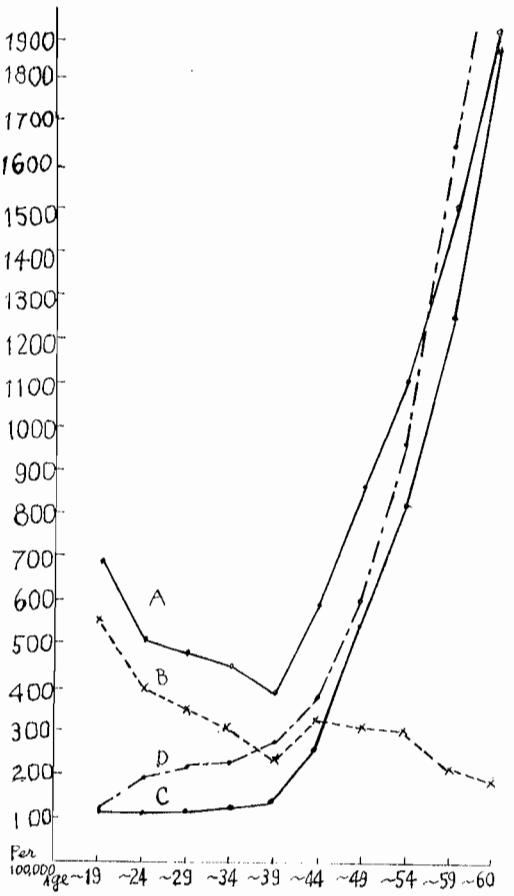

図 7　年令層別死亡率（1961）
A．合計　B．職務上　C．職務外
D．国民全体

異った傾向をみせている。国民全体では当然のことながら，年令がすすむにしたがって死亡率が高くなっているのに，船員の場合は，～19才のところがいちぢるしく高く，以後だんだん減少して～39才のところで最低となり，その後急上昇している。これを職務上と職務外とに分けてみると図に示す通りで，職務上死亡が若年層にいちぢるしく多いためであることがわかる。職務外の死亡では，～19才では国民一般とほぼ一致しているが以後各年令層ともかなり低率である。すなわち職務上の死亡が高率であることが，船員の年令階層別死亡曲線を特徴づけている。

この傾向は漁船において特にいちぢるしいことは図8に示す通りである。1961年漁船船員の～19才における職務上死亡率は10万対819という数字を示し汽船の4倍をこえる高率である。多くの若い漁船船員が海難によって年々失われている実態は1日も早く改善されなければならない。

他の産業の労働者と比べてみると図9の通りで，総数では，船員の死亡率は農林漁業および

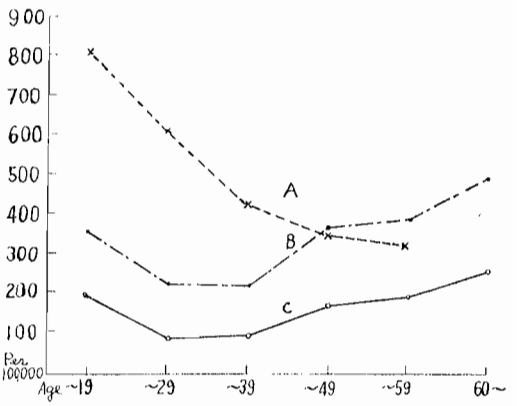

図 8　年令層別職務上死亡率（1961）
A．漁船　B．機帆船　C．汽船

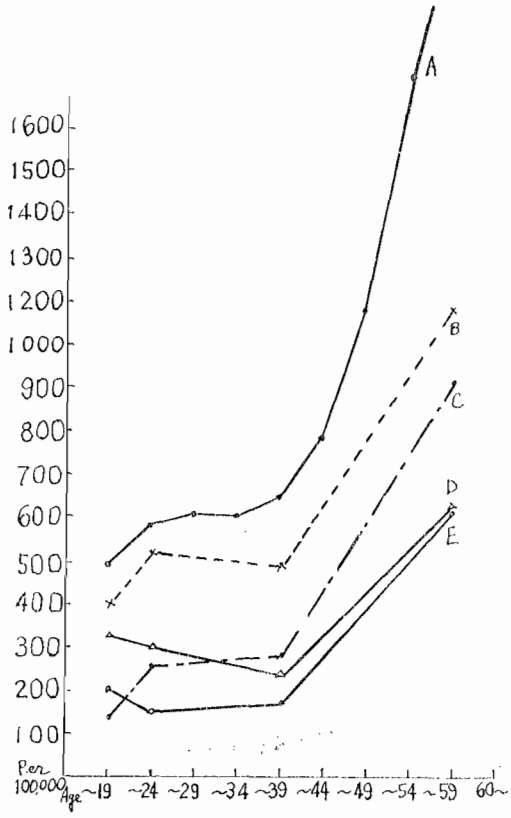

図 9　各種産業における年令層別死亡率
A．船員　B．鉱山業　C．農林業
D．運輸業　E．専門的技術的職業

採鉱採石業より低いが，年令階層別にみると，どの産業労働者よりも高率であることがわかる。総数では高年令者のいる産業では，死亡率が高く出るから比較が困難である。

4.　死亡原因について

船員の原因別死亡率を1956～1962年の平均でみると図10の通りである。第1位が海難で10万対246，2位が災害の107，これを合計した職務上によるものが353という高率で，職務外になっている不慮の事故死を加えると，407が事故による死亡で，全死亡の実に66%という高率を示している。

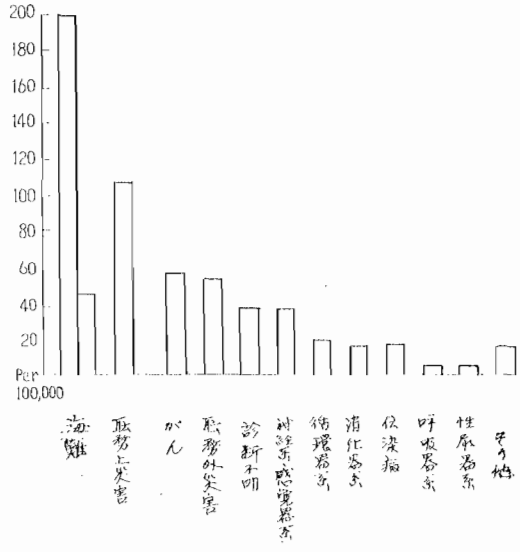

図10　死　亡　原　因

病気では悪性新生物が第1位で，中枢神経系の血管損傷，循環器系の疾患，消化器系の疾患・結核その他の伝染病という順序になっている。

他の産業労働者との比較は困難であるが，1961年について国鉄従業員との比較を試みると図11の通りである。事故死がいちぢるしく高いこと，悪性新生物，中枢神経系の疾患，循環器系の疾患等いずれも船員の方が高率である。ここで注意を要するのは，船員の場合疾病名がは

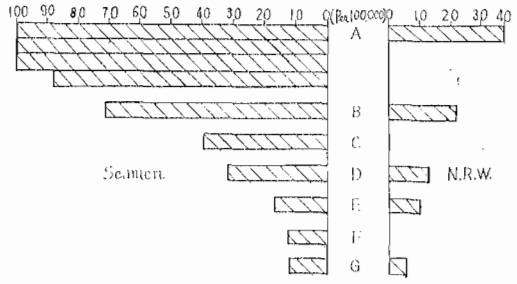

図11　船員と国鉄従業員の死因比較
A．災害　B．がん　C．診断不明
D．神経系，感覚器系疾患
E．循環器系疾患　F．伝染性疾患
G．消化器系疾患

っきりしないものが非常に多いことである。医師の乗船していない多くの船内では，止むを得ないとはいえまことに残念なことである。

次に年令階層別に主な死因の比率の変化をみると図12の通りである。これは職務外死亡だけを対象にしたものである。～19才の層では事故による死亡が58%を占め，年令がすすむにつれて低下している。悪性新生物は40才代で25%をこえ，50才をこえると30%に達する。中枢神経系の疾患は50才をこえると20%に達する。循環器系疾患も年令と共に徐々に増加し50才代で10%に達する。

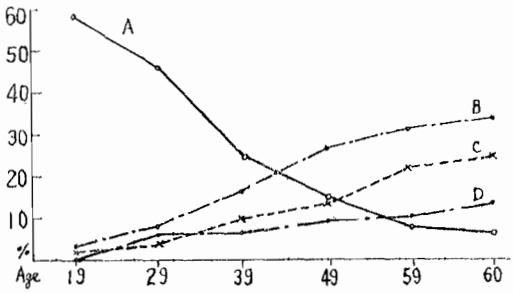

図12　年令層別死亡比率
A．災害　B．がん　C．神経系，感覚器系疾患　D．循環器の疾患

5.　死亡の季節的変動

船員の死亡の季節的変動を国民一般と比較してみると図13の通りである。これは各月の構成比率をみたものである。1月に大きなピークがあり，8月にいちぢるしく谷がある。これはすでに述べたように，海難による死亡率の高いこと

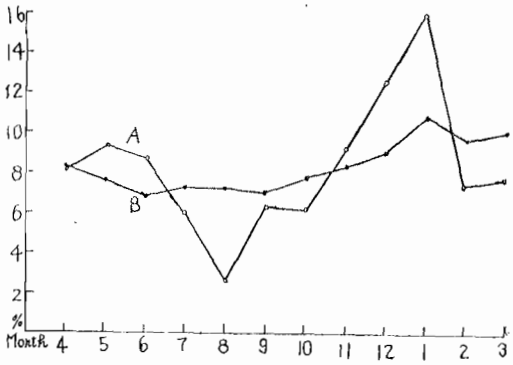

図13　船員の月別死亡数比率
A．船員　B．国民全体

と関連がある。冬季は日本近海は特によく荒れるので，漁船・機帆船等の遭難が相ついで起ることは，新聞紙上でよく報ぜられるところである。夏は一般に海上が平おんなので遭難が少い。国民の死亡傾向をみても近年冬型に移行していることがはっきりしているが，これは衛生状態の改善のため，成人病の比率が高まったためと説明されている。ところが船員の場合は，海難死亡が冬型を強めている大きな原因で，悲しむべき現象なのである。

6.　む　す　び

船員の死亡数は年々1,200名をこえる。この中で66%が海難その他の災害によるものである。殊に漁船，機帆船における災害死の比率がいちぢるしく高い。船の運航の安全と作業安全の面から，漁船，機帆船等の小型船に対する指導コンサルタントが重要な課題である。

2. 船内における傷病発生の実態に関する統計

目　　次

(1) 汽船船内における傷病発生の実態…… 8
(2) 航路別にみた汽船船内傷病発生の実態……
(3) 医療無線電報の実態……

1. 汽船船内における傷病発生の実態

船医の乗船している某社船における傷病発生の推移をみると表1の通りである。

1航海の平均日数は大体100日で，1航海当り災害件数が11～14件，疾病が74～103件である。これを1年1隻当りでみると，災害で42～57件，疾病で283件～329件となっている。また1人1年当りについてみると，5カ年平均で災害で0.89回，疾病で5.68回診療を受けたことになり，合計では6.6回となる。すなわち某社の全船員についてみると，1年に約7回平均船医の療診を受けていることを示している。

次に同じ会社について，1962年における10航路107航海分をえらんで職種別，病類別に発生状況をみたのが表2である。その中病類別に発生率を図示すると図1の通りである。消化器系の疾患が第一位で1年1人当り1.7回診療を受けており，呼吸器の疾患もほぼ同率の1.7回となっている。これに次ぐのが災害の0.87回，伝染病等の0.73回神経系および感覚器疾患の0.59回等である。

表1　船内傷病発生件数の推移（某社）

年度	調査船隻数	平均航海日数	1航海当り発生件数		1年1隻当り発生件数		1年1人当り発生件数		
			災害	疾病	災害	疾病	災害	疾病	合計
1958	129	104	13	92	47	323	0.81	5.59	6.40
1959	152	91	14	74	57	297	1.01	5.27	6.28
1960	132	92	14	81	55	321	0.95	5.54	6.49
1961	128	101	12	103	45	329	0.85	6.23	7.08
1962	128	98	11	76	42	283	0.86	5.80	6.66

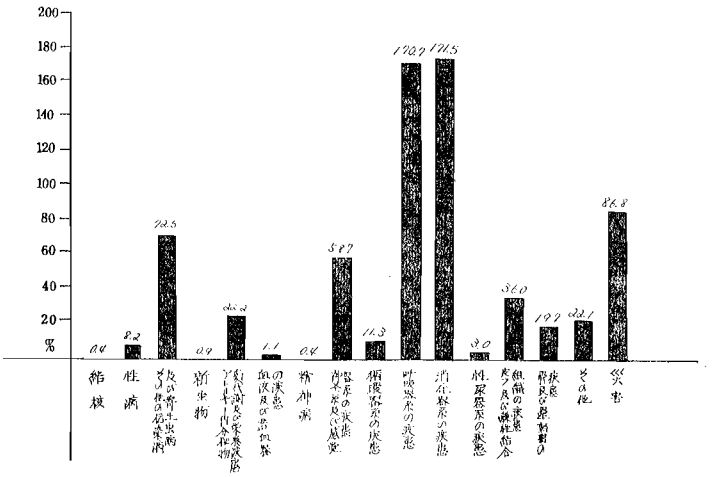

図1　病類別，船内傷病発生率（乗組員数比）1962年

表 2　職種別・病類別・傷病発生

大分類	中分類	職名 / 人員%	職・甲 人員	職・甲 %	職・機 人員	職・機 %	職・無 人員	職・無 %	職・士 人員	職・士 %	職員 人員	職員 %
A 伝染病及び寄生虫病	1	呼吸器系の結核			1		1				3	
	2	その他の結核			1	0.65	1	1.08	1	1.15	3	0.6
	3	梅毒及びその続発症										
	4	淋菌感染及びその他の性病	3 3	2.04					2 2	2.30	5 5	1.0
	5	腸管伝染病	1						3		4	
	6	その他の細菌性疾患	2		1		1				4	
	7	スピロヘータ病(梅毒を除く)										
	8	ビールスによる疾患	125		118	77.12	56	60.21	44	50.57	343	71.4
	9	発診チフス及びその他のリケッチア病										
	10	マラリア										
	11	その他の伝染病及び寄生虫病	122		117		55		41		335	
		小計	128	(87.07)	119	(77.77)	57	(61.29)	47	(54.02)	351	(73.1
B 新生物	1	悪性新生物										
	2	良性及び性質不明の新生物	2		2		1		2		7	
		小計	2	1.36	2	1.31	1	1.08	2	2.30	7	1.46
C 内分泌及び代謝性疾患	1	アレルギー疾患	19		17		22		11		69	
	2	甲状腺の疾患										
	3	糖尿病	1								1	
	4	その他の内分泌腺の疾患										
	5	ビタミン欠乏症及びその他の物質代謝病	17		3		1		4		25	
		小計	37	25.17	20	13.07	23	24.73	15	17.24	95	19.7
D 血液及び造血器の疾患	1	血液及び造血器の疾患			3		1				4	
		小計			3	1.96	1	1.08			4	0.8
E 精神神経及び精神病人格異常	1	精神病										
	2	精神神経症					1				1	
	3	性格行動及び知能の異常										
		小計					1	1.08			1	0.2
F 神経系及び感覚器の疾患	1	中枢神経系の血管損傷	2		2						4	
	2	その他の神経系の疾患	26		25		17		11		79	
	3	視器の疾患	48		38		29		19		132	
	4	聴器の疾患	6		10		11		17		44	
		小計	80	54.42	75	49.02	57	61.29	47	54.02	259	53.
G 循環器系の疾患	1	リユウマチ熱			1						1	
	2	滲性リユウマチ性心臓疾患										
	3	動脈硬化性及び変性性心臓疾患										
	4	その他の心臓の疾患			1						1	
	5	高血圧性疾患			3				4		7	
	6	動脈の疾患										
	7	静脈の疾患及びその他の循環器系の疾患	15		20		17		8		54	
		小計	15	10.20	25	16.34	17	17.83	12	13.79	63	13.
H 呼吸器系の疾患	1	急性上気道感染	285		223		165		119		792	
	2	インフルエンザ	6		3		2		3		14	
	3	肺炎	1		2				1		4	
	4	気管支炎	25		16		8		6		55	
	5	その他の呼吸器系の疾患	3				2				5	
		小計	320	217.69	244	159.48	177	190.32	129	148.28	870	181.
I 消化器系の疾患	1	口腔及び食道の疾患	49		40		26		22		137	
	2	胃及び十二指腸の疾患	167		132		107		86		492	
	3	虫垂炎	1						1		2	
	4	ヘルニア										
	5	その他の腸及び腹膜の疾患	89		80		58		38		265	
	6	肝臓、胆嚢及び膵臓の疾患	14		5		1		3		23	
		小計	320	217.69	257	167.97	192	206.45	150	172.41	919	191.
J 性器の疾患	1	腎炎及びネフローゼ			1				1		2	
	2	その他の泌尿器系の疾患	7		4		1		1		7	
	3	男性々器の疾患					1		2		3	
		小計	7	0.68	5	3.27	2	2.15	4	4.60	12	2.
K 皮膚及び結合織疾患	1	皮膚及び皮下組織の感染	37		22		24		14		97	
	2	その他の皮膚及び皮下組織の感染	25		36		18		10		89	
		小計	62	42.18	58	37.91	42	45.16	24	27.59	186	38.
L 骨及び関節の疾患	1	関節炎及びリウマチ(リウマチ熱を除く)	21		18		6		6		51	
	2	骨髄炎及びその他の骨、関節の疾患										
	3	その他の筋骨格系の疾患	1		2		10				13	
		小計	22	14.97	20	13.07	16	17.20	6	6.90	64	13.
M 症状及び診断名不明の老衰適当の状態	1	系統又は器官に関する原因不詳の症状	40		31		15		33		119	
	2	老衰及び診断名不適当の状態	23		6		5		9		43	
	3	不明	3		1		1				5	
		小計	66	44.90	38	24.84	21	22.58	42	48.28	167	34
N 外因(災害事故)・中毒及び暴力傷害の	1	骨折	1								1	
	2	骨折を伴わない関節脱臼										
	3	関節の捻挫及び隣接筋の筋違い	2		6		2		3		13	
	4	内臓の損傷(骨折を除く)										
	5	裂傷及び開放創	28		30		20		13		91	
	6	表在損傷ならびに皮膚表面に損傷のない挫傷及び破砕	20		22		14		6		62	
	7	異物侵入	6		6		7		1		20	
	8	熱傷	4		8		2		2		16	
	9	毒物の作用			2		1		2		5	
	10	その他及び詳細不明の外因の作用	5		7		3		11		26	
		小計	66	44.90	81	52.94	49	52.69	38	43.68	234	48.
疾病合計			1053	716.33	886	576.01	601	646.23	478	549.42	2998	624.
総合計			1119	761.22	947	618.95	650	698.92	516	593.10	3232	673.
兼組入員			147		153		93		87		480	

〔註〕 10航路　107航海分　延日数　10,974日　1年換算　30.07隻×49.7人＝1,496人　1年に1人

種別・病類別・傷病発生率（1962年）

	職事		職員		部甲		部機		部事		部員		合計		
%	人員	%	人員	%	人員	%	人員	%	人員	%	人員	%	人員	%	構成比
08	1	1.15	3 / 3	0.62			1 / 1 / 2	0.51	1 / 1	0.47	1 / 2 / 3	0.30	4 / 2 / 6	0.40	0.06
	2 / 2	2.30	5 / 5	1.04	1 / 53 / 54	13.11	3 / 43 / 46	11.76	18 / 18	8.45	4 / 114 / 118	11.61	4 / 118 / 123	8.22	1.20
	3		4 / 4		6 / 3		5 / 3		3		11 / 9		15 / 13		
.21	44	50.57	343	71.46	2 / 313	75.97	2 / 211	53.96	217	101.88	4 / 341	72.93	4 / 1084	72.46	10.57
							2 / 192				2 / 715		2 / 1080		
	41		335		302				214						
.29	47	(54.02)	357	(73.72)	367	(89.08)	259	(66.24)	236	(110.80)	862	(84.84)	1213	(81.08)	(11.83)
	2		7		3		2		2		7		14		
08	2	2.30	7	1.46	3	0.73	2	0.51	2	0.94	7	0.69	14	0.94	0.14
	11		69		68		62		40		170		239		
			7		1				21		22		23		
									1		1		1		
	4		25		19		15		10		44		69		
.73	15	17.24	95	19.77	88	21.36	77	19.69	22	83.80	237	23.33	332	22.19	3.24
			4		8		3		1		12		16		
.08			4	0.83	8	1.94	3	0.77	1	0.47	12	1.18	16	1.07	0.16
							1				1		1		
			1				3		1		4		5		
08			1	0.21			4	1.02	1	0.47	5	0.47	6	0.40	0.06
			4		2		2		3		9		11		
	11		79		93		88		49		230		309		
	79		132		160		136		39		335		467		
	17		44		26		13		8		47		91		
.27	47	54.02	259	53.96	281	68.20	239	61.13	99	46.48	619	60.93	878	58.67	8.56
			1		4				3		4		5		
					1						1		1		
			1		1						1		2		
	4		9		9		11		11		31		38		
	8		54		33		25		11		69		123		
.83	12	13.79	43	13.12	45	10.92	36	9.21	25	11.74	106	10.43	169	11.30	1.65
	119		792		655		537		330		1522		2374		
	3		14		24		9		5		38		52		
	1		4		2		2		1		3		7		
	6		55		49		29		18		96		157		
			5		6		15		3		24		29		
032	129	148.28	870	181.25	736	178.64	590	150.89	357	167.61	1683	165.65	2553	170.66	24.90
	22		137		87		89		61		237		374		
	86		492		387		344		191		924		1416		
	1		2		4		3		2		9		11		
	38		265		167		141		87		395		660		
	3		23		45		14		22		81		104		
.45	150	172.41	979	191.46	692	167.96	597	151.15	363	170.42	1646	162.01	2565	171.46	25.02
	1		2				1				1		3		
	1		7		8		8		4		21		28		
	2		3		4		2		5		11		14		
.15	4	4.60	12	2.50	12	2.91	12	3.07	9	4.23	33	3.25	45	3.01	0.44
	14		97		76		62		39		177		274		
	10		89		87		45		41		175		264		
.16	24	27.59	186	38.75	165	40.05	107	27.37	80	37.56	352	34.65	838	35.96	5.25
	6		57		100		77		38		215		266		
							3		1		4		4		
			13		1		7		3		11		24		
.20	6	6.90	64	13.33	101	24.51	87	22.25	42	19.72	230	22.64	294	17.65	2.87
	33		119		22		25		27		74		193		
	9		43		34		22		26		82		125		
			5		3		1		3		7		12		
.58	42	48.28	167	34.79	59	14.32	48	12.28	56	26.29	163	16.04	330	22.06	3.22
			1		4						4		5		
	3		13		48		13		5		66		79		
							1				1		1		
	13		91		153		112		83		348		439		
	6		62		225		104		36		365		427		
	1		20		131		32		8		171		191		
	2		16		22		38		25		86		102		
	2		5		4				1		5		10		
	11		26		7		8		4		19		45		
.69	38	43.68	234	48.75	595	144.42	308	78.77	162	76.06	1065	104.82	1297	86.83	12.67
.23	478	549.42	2998	624.58	2557	620.63	2015	525.57	1343	630.57	5915	586.12	8952	598.41	87.32
.92	516	593.10	3232	673.33	3152	765.05	2363	604.35	1505	706.57	7020	695.94	10252	685.29	100.00
	87		480		412		391		213		1016		1496		

人＝1,496人　　1年に1人　6.9回受診

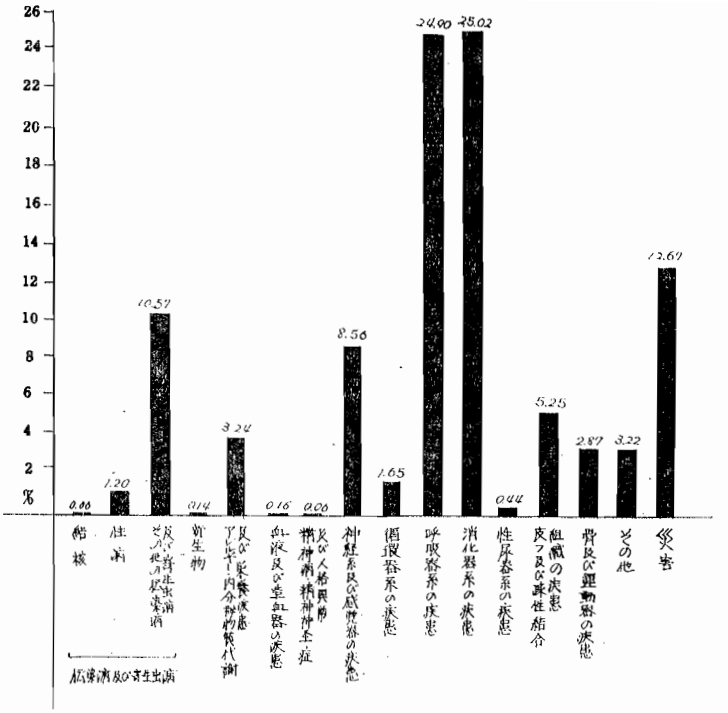

図 2　船内発生傷病，病類別構成（1962年）

更に病類別の構成でみると，図2の通りで呼吸器系の疾患と消化器系の疾患がそれぞれ25%で，これを合わせると50%に達する。次は災害の12.7%，伝染病等の10.6%神経系および感覚器の疾患の8.6%という順序になる。

職種別にみると図3の通りで，甲板部の部員の受診回数が1人1年につき7.6回でもっとも多く，甲板部職員がこれとほぼ同率で，事務部職員が5.9回でもっとも少くなっている。

別の某社の資料によると，傷病類別治療日数，労働軽減日数，特別食数等，表3の通りである。延治療日数では皮膚病が第一位で，消化器系の疾患が第二位，呼吸器系の疾患が第三位である。1件当り治療日数では，アレルギー性・栄養の疾患がもっとも長く，循環器系の疾患，皮膚病がこれに次いでいる。延休業日数では災害が第

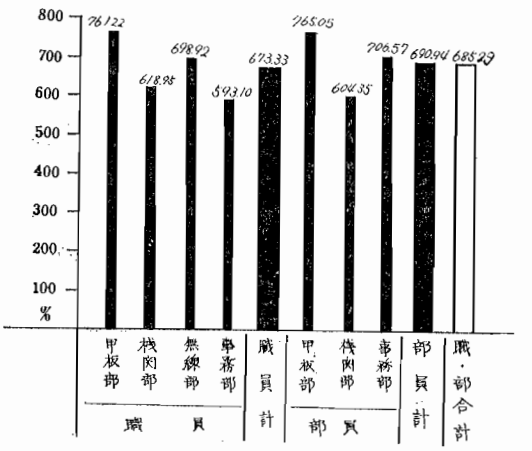

図 3　職種別船内傷病発生率（1962年）

一位で，消化器系の疾患が第二位，呼吸器系の疾患が第三位となっている。

また，船内に発生する傷病について10位までならべると図4の通りとなる。感冒が第一位で1人1年ほぼ0.8回かかるわけである。

表 3　傷病と治療・労働軽減日数及び食餌（1960年某社）

病名	件数	治療日数		労働軽減日数		特別食数	絶食数
		合計	1件当り	軽業(日)	休業(日)		
伝染病及び寄生虫病	156	1,095	7.0	4	28	64	1
アレルギー性，栄養疾患	330	4,524	13.7	2	9	42	
造血器の疾患・貧血	9	15	1.7		1		
精神病・神経症	20	88	4.4				
神経・感覚器の疾患	974	6,631	6.8	10	49	15	
循環器系の疾患	199	2,310	11.6	18	3		
呼吸器系の疾患	2,304	9,668	4.2	26	122	179	
消化器系の疾患	2,425	15,690	6.5	72	221	1,306	22
泌尿器系の疾患	109	862	7.9	13	33	53	
皮膚その他の疾患	1,711	19,550	11.4	8	19	4	
骨，運動器の疾患	293	1,852	6.3	4			
診断不適当の状態	342	1,077	3.1		12	57	
不慮の事故・中毒	1,745	8,839	5.1	144	417	68	
計	10,617	72,201	平均6.8	301	914	1,788	23

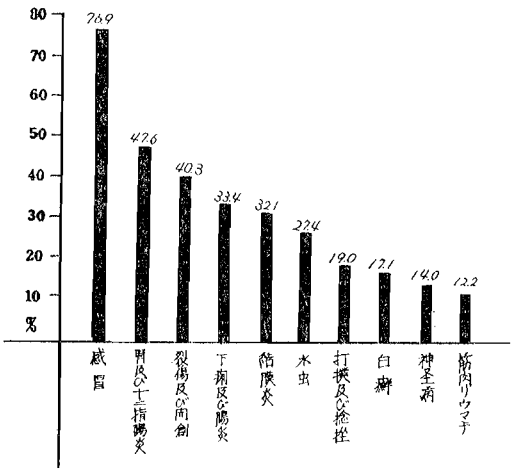

図 4　船内における10大傷病発生比率
（1960年　某社）

職種別に罹病率の高いものから，第一位から第五位まで示すと表4の通りである。職種によって傷病発生のおもむきをやや異にしていることがわかる。

同様にして傷害の種類について職種別にみると表5の通りである。船匠，甲板員，甲庫手，操機手，機関員，司厨員等が1年1回以上のけがをしている。

船内発生の10大傷病を年令層別にみると表6の通りである。神経痛，筋肉リウマチが50才以上の高令者に特に多いが，他はほとんど若年層ほど高率を示している。特に10才代の罹病率がいちぢるしく高くなっている。

表7は年令別に病類別構成をみたものである。それぞれの年代で第一位を占めているのをみると，10才代では災害，20才代では消化器の疾病と呼吸器の疾病，30才代では消化器の疾病，40才代では皮膚病，50才代では消化器の疾病となっている。

表 4　職種別にみた船内でかかりやすい病気（1960年　某社）

職名 ＼ 順位 罹病率		I 病名	I 罹病率 %	II 病名	II 罹病率 %	III 病名	III 罹病率 %	IV 病名	IV 罹病率 %	V 病名	V 罹病率 %
船	長	感冒	78.9	下痢腸炎	69.6	水虫	65.0	胃，十二指腸炎	48.7	白癬	39.4
一	航	〃	90.2	〃	47.0	〃	45.1	〃	41.2	裂傷開創	23.5
二	航	〃	83.9	胃十二指腸炎	46.4	〃	41.1	下痢腸炎	37.5	〃	32.1
三	航	〃	123.3	〃	75.4	下痢腸炎	46.6	裂傷開創	42.5	結膜炎	30.1
機関	長	結膜炎	254.7	感冒	78.5	神経痛	64.3	胃，十二指腸炎	61.9	水虫	57.1
一	機	感冒	86.4	水虫	40.3	裂傷開創	32.6	下痢腸炎	26.7	胃，十二指腸炎	26.9
二	機	〃	58.1	胃，十二指腸炎	39.2	〃	35.1	水虫	31.1	下痢腸炎	31.1
三	機	〃	78.2	〃	38.0	水虫	32.2	裂傷開創	32.2	結膜炎	24.2
通信	長	〃	103.9	〃	78.4	下痢腸炎	51.0	便秘	27.4	〃	23.5
二	通	〃	81.4	〃	66.0	〃	46.2	水虫	37.4	不眠	30.8
三	通	〃	65.2	〃	62.9	〃	55.9	裂傷開創	30.3	痔疾	21.0
事務	長	〃	197.8	歯齦炎，齲歯	124.7	〃	120.4	結膜炎	55.9	水虫	43.0
事	員	〃	55.5	胃，十二指腸炎	28.5	〃	27.0	裂傷開創	19.5	結膜炎	19.5
船	医	高血圧	35.0	裂傷開創	20.0	神経痛	15.0	痔疾	15.0	脚気	12.5
甲板	長	感冒	72.0	筋肉リウマチ腰痛	40.8	胃，十二指腸炎	38.4	打撲捻挫	21.6	下痢腸炎	19.2
船	匠	裂傷開創	96.1	胃，十二指腸炎	86.8	打撲捻挫	49.6	神経痛	46.5	〃	37.2
甲	庫	感冒	62.4	裂傷開創	48.0	〃	40.8	水虫	36.0	結膜炎	36.0
航	手	〃	80.3	胃，十二指腸炎	71.4	下痢腸炎	51.2	裂傷開創	44.6	〃	38.7
甲	員	〃	85.3	裂傷開創	60.1	胃，十二指腸炎	40.1	打撲捻挫	35.0	〃	33.3
操機	長	〃	84.6	胃、十二指腸炎	35.9	打撲捻挫	30.8	結膜炎	28.2	白癬	25.6
機	庫	〃	64.8	結膜炎	36.0	神経痛	16.8	気管支炎	7.2	歯齦炎，齲歯	7.2
機	手	〃	55.6	裂傷開創	40.7	水虫	30.7	胃，十二指腸炎	30.7	下痢腸炎	26.6
缶	手	〃	54.9	胃，十二指腸炎	43.2	裂傷開創	41.4	下痢腸炎	35.1	打撲捻挫	29.7
機	員	〃	62.0	〃	45.6	〃	37.3	水虫	30.2	下痢腸炎	25.3
司厨	長	〃	60.8	裂傷開創	32.6	筋肉リウマチ腰痛	30.4	下痢腸炎	30.4	結膜炎	23.9
調	手	〃	61.7	胃、十二指腸炎	60.0	裂傷開創	55.1	結膜炎	38.3	水虫	26.1
司	員	〃	110.7	〃	83.4	〃	64.4	水虫	43.8	白癬	37.2

表 5　職種別にみた傷害の種類（1960年　某社）

職　　名	打撲捻挫	裂傷開創	骨折脱臼	火　　傷	眼内異物	計
	%	%	%	%	%	%
船　　長	8.9	26.7				35.7
〃　　航	11.8	23.5	1.9	3.9		41.1
二　　航	3.6	32.1	0.9	5.4	5.4	47.4
三　　航	16.4	42.5		2.7	4.1	61.7
機　関　長		9.5		2.4		11.9
〃　　機	11.5	32.7		1.9	5.8	51.9
二　　機	13.5	35.1	1.4	8.1	10.8	68.9
三　　機	9.2	32.2		12.6	17.2	71.2
通　信　長	3.9	23.5		3.9	1.9	33.2
二　　通	4.4	20.0		6.6		31.0
三　　通	4.7	30.2		2.3	4.7	41.9
事　務　長	13.0	26.1	8.7		4.3	52.1
事　　員	1.5	19.7		4.5		25.7
船　　医	2.5	20.0				22.5
甲　板　長	19.5	17.1		4.9	19.5	61.0
船　　匠	50.0	96.9		6.3	18.8	172.0
甲　　庫	41.5	48.7	2.4	7.3	22.0	121.9
舵　　手	26.8	44.6	1.2	4.2	10.7	87.5
甲　　員	35.2	60.4	0.3	4.8	26.3	127.0
操　機　長	30.1	17.9		7.7	7.7	63.4
機　　庫						
機　　手	63.4	119.5	4.8	24.3	61.0	273.0
缶　　手	27.5	38.3	0.8	12.5	20.0	99.1
機　　員	31.5	61.3	2.7	18.9	20.7	135.1
司　厨　長	2.2	8.2		1.0	0.5	11.9
調　　手	6.2	39.7		11.8	3.1	60.8
司　　員	24.8	64.5	0.8	9.1	3.3	102.5

表 6　年令と10大傷病発生比率（1960年　某社）

年　令	感　冒	胃十二指腸炎	裂傷開創	下痢腸炎	結膜炎	水　虫	打撲捻挫	白　癬	神経痛	筋肉リウマチ
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
10才台	347	205	337	79	79	147	142	137	21	21
20才～	102	62	56	42	32	34	24	22	13	11
30才～	70	47	35	30	19	23	15	13	12	11
40才～	57	33	24	28	20	33	13	0	17	15
50才以上	46	26	21	23	19	10	18	12	143	23

表7 年令別病類別発生率（1960年 某社）

年令	伝染病寄生虫	アレルギー性栄養疾患	精神病	神経系感覚器	循環器	呼吸器	消化器	泌尿器	皮膚	不慮の事故	運動器	その他	合計
	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
10才～	2.4	2.0	—	5.5	0.9	19.3	17.1	1.9	21.4	24.9	0.9	3.7	100.0
20才～	1.8	3.1	0.2	8.6	1.0	23.0	23.0	1.6	15.3	17.3	2.0	3.1	100.0
30才～	1.1	3.3	0	9.3	1.4	21.6	24.2	0.6	15.2	15.8	2.9	4.6	100.0
40才～	1.5	2.6	0	10.7	3.0	20.2	19.8	0	21.4	12.4	4.1	4.3	100.0
50才以上	0.3	3.9	—	12.4	9.6	15.8	20.4	0.7	13.3	13.2	6.8	3.6	100.0

2. 航路別にみた汽船船内傷病発生の実態

航路別に船内傷病の発生状況を某社の例についてみると表1の通りである。これは1年1人当りの罹病回数を5カ年平均したものである。疾病ではペルシャ湾航路の6，7回が第一位で，世界一周，中近東，オーストラリア，中南米という順位を示しており，災害では南米西岸，オーストラリアが第一位を示し，ペルシャ湾，中南米，ニューヨークという順位となっている。

次に航路別，病類別に1962年の例についてみると表2の通りである。傷病の発生率でみると，オーストラリア航路の 9，7 回が最高で第一位を占め，中近東，中南米，西廻り一周，南米西岸，黒海，ニューヨーク，カルカッタ，欧州という順序になっていて，表1とはかなりおもむきを異にしている。

病類別でみると，伝染病および寄生虫病では，中近東航路が第一位を占め，新生物では印・パ航路が第一位を占めている。アレルギー栄養の疾患では黒海航路が第一位であり，血液および造血器の病気では中南米航路にもっとも多い。精神病および神経症では中南米航路，オーストラリア航路に多く，神経系および感覚器の疾患では南米西岸が第一位を占めている。循環器系

表1 航路別船内傷病発生回数（1年1人当り 1958～62年平均）

航路名	調査航海数	疾病	順位	災害	順位	合計	順位
世界一周	59	6.48	2	0.88	8	7.36	2
ニューヨーク	123	5.51	9	0.93	4	6.44	9
北米西岸	31	5.46	10	0.63	13	6.09	12
中南米	33	5.85	5	1.05	3	6.90	5
南米西岸	22	5.56	8	1.14	1	6.70	6
欧州	58	5.23	13	0.79	11	6.02	13
中近東	57	6.32	3	0.89	7	7.21	3
印・パ	40	5.33	12	0.86	9	6.19	11
カルカッタ	25	5.81	6	0.68	12	6.49	8
オーストラリア	64	5.97	4	1.14	1	7.11	4
東亜不定期	62	5.68	7	0.92	5	6.60	7
ネシャー欧州	18	5.44	11	0.82	10	6.26	10
黒海	24	5.07	14	0.91	6	5.98	14
ペルシャ湾	37	6.71	1	1.12	2	7.83	1
アフリカ東岸	16	4.53	15	0.56	14	5.09	15
平均	669	5.69		0.90		6.59	

表 2　航路別・病類別・船内傷病発生率（乗組員数比）（1962年）

大分類	中分類		社名 / 職名	西廻り航	ニューヨーク	中南米	南米	欧州	中近東	印パ	カルカッタ	オーストラリア	黒海	合計
				%										
A	伝染病及び寄生虫病	1	呼吸器系の結核											
		2	その他の結核		0.2	1.1	1.8	0.3	0.6		1.3			0.4
		3	梅毒及びその続発症											
		4	淋菌感染及びその他の性病		4.0	4.5	5.5	22.4	3.8	6.0	5.3	7.9	2.6	8.2
		5	腸管伝染病											
		6	その他の細菌性疾患											
		7	スピロヘータ病（梅毒を除く）											
		8	ビールスによる疾患	40.8	54.4	80.9	72.7	75.9	120.9	83.1	48.0	91.0	90.8	72.5
		9	発疹チフス及びその他のリケッチア病											
		10	マラリア											
		11	その他の伝染病及び寄生虫病											
			小計	40.8	58.8	86.5	80.0	98.5	124.3	87.2	54.7	98.9	93.4	81.1
B	新生物	1	悪性新生物											
		2	良性及び性質不明の新生物											
			小計		0.8			1.5	0.6	3.6		1.1	1.3	0.8
C	アレルギー疾患及び内分泌代謝性疾患	1	アレルギー疾患											
		2	甲状腺の疾患											
		3	糖尿病											
		4	その他の内分泌腺の疾患											
		5	ビタミン欠乏症及びその他の物質代謝病											
			小計	31.9	23.3	24.7	12.9	16.0	18.4	15.7	16.0	27.2	42.1	22.2
D	血液及び造血器疾患	1	血液及び造血器の疾患											
			小計		0.2	3.4		2.3	1.9	1.2				1.1
E	精神及び神経病異常人格	1	精神病											
		2	精神神経症											
		3	性格行動及び知能の異常											
			小計		0.2	1.1		0.6	0.6			1.1		0.4
F	神経系及び感覚器の疾患	1	中枢神経系の血管損傷											
		2	その他の神経系の疾患											
		3	視器の疾患											
		4	聴器の疾患											
			小計	50.9	57.5	84.4	125.5	45.6	33.5	55.4	56.0	64.0	102.6	58.7
G	循環器系の疾患	1	リユウマチ熱											
		2	慢性リユウマチ性心臓疾患											
		3	動脈硬化性及び変性性心臓疾患											
		4	その他の心臓の疾患											
		5	高血圧性疾患											
		6	動脈の疾患											
		7	静脈の疾患及びその他の循環器系の疾患											
			小計	13.4	10.6	14.6	1.8	12.8	11.4	9.6	6.7	16.9	6.6	11.3
H	呼吸器系の疾患	1	急性上気道感染											
		2	インフルエンザ											
		3	肺炎											
		4	気管支炎											
		5	その他の呼吸器系の疾患											
			小計	234.4	157.7	237.1	149.1	140.4	163.9	92.6	177.3	244.9	128.7	170.7
I	消化器系の疾患	1	口腔及び食道の疾患											
		2	胃及び十二指腸の疾患											
		3	虫垂炎											
		4	ヘルニア											
		5	その他の腸及び腹膜の疾患											
		6	肝臓、胆嚢及び膵臓の疾患											
			小計	237.5	167.8	167.4	205.5	118.9	238.6	107.2	134.7	217.1	180.3	171.5
J	性の尿器系の疾患	1	腎炎及びネフローゼ											
		2	その他の泌尿器系の疾患											
		3	男性生殖器の疾患											
			小計	5.7	3.3	4.5		2.3	1.9	2.4	5.3	3.4		3.0
K	皮膚及び皮下組織の疾患	1	皮膚及び皮下組織の感染											
		2	その他の皮膚及び皮下組織の感染											
			小計	36.3	27.9	27.0	14.6	27.6	80.4	37.4	30.7	52.6	22.4	36.0
L	骨及び関節の運動器の疾患	1	関節炎及びリウマチ（リウマチ熱を除く）											
		2	骨髄炎及びその他の骨、関節の疾患											
		3	その他の筋骨格系の疾患											
			小計	21.0	14.1	15.7	10.9	12.5	35.4	12.1	24.0	51.7	21.1	17.7
M	症状及び老衰診断名不適当の状態	1	系統又は器官に関する原因不詳の症状											
		2	老衰及び診断名不適当の状態											
		3	不明											
			小計	31.2	17.6	36.0	1.8	11.3	57.3	22.9	8.3	15.0	27.6	22.1
N.	不慮の事故（災害）・中毒及び暴力	1	骨折											
		2	骨折を伴わない関節脱臼											
		3	関節の捻挫及び隣接筋の筋違い											
		4	内臓の損傷（骨折を除く）											
		5	裂傷及び開放創											
		6	表在損傷ならびに皮膚表面に損傷のない											
		7	異物侵入　挫傷及び破砕											
		8	熱傷											
		9	毒物の作用											
		10	その他及び詳細不明の外因の作用											
			小計	77.7	75.6	101.1	148.1	76.2	87.3	88.0	77.3	166.3	61.8	86.8
疾病合計				705.1	539.8	712.4	601.8	470.4	763.3	454.2	514.7	807.9	676.3	598.5
総合計				782.8	615.4	813.5	750.9	566.6	831.6	542.2	592.0	974.2	738.2	685.3
乗組員数				157	369	89	55	344	158	83	75	89	76	1486

表 3　航路別・船内発生傷病の病類別構成（1962年）

大分類	中分類		社名／職名	構成比										
				西廻り・周	ニューヨーク	中南米	南米西岸	欧州	中近東	印パ	カルカッタ	ナホトカ	黒海	合計
A	伝染病及び寄生虫病	1	呼吸器系の結核											
		2	その他の結核		0.04	0.14	0.24	0.05	0.07		0.23			0.06
		3	梅毒及びその続発症											
		4	淋菌感染及びその他の性病		0.66	0.55	0.29	3.95	0.45	1.11	0.90	0.81	0.36	1.20
		5	腸管伝染病											
		6	その他の細菌性疾患											
		7	スピロヘータ病（梅毒を除く）											
		8	ビールスによる疾患	5.21	8.85	9.94	9.68	13.39	14.21	15.33	8.11	9.34	12.30	10.57
		9	発疹チフス及びその他のリケッチア病											
		10	マラリア											
		11	その他の伝染病及び寄生虫病											
			小計	5.21	9.56	10.64	10.65	17.39	14.73	16.44	9.24	10.15	12.66	11.83
B	新生物	1	悪性新生物											
		2	良性及び性質不明の新生物											
			小計		0.13			0.26	0.07	0.67		0.12	0.18	0.14
C	アレルギー疾患及びホルモン分泌異常及び内分泌腺の疾患	1	アレルギー疾患											
		2	甲状腺の疾患											
		3	糖尿病											
		4	その他の内分泌腺の疾患											
		5	ビタミン欠乏症及びその他の物質代謝病											
			小計	4.07	3.79	3.04	1.69	2.82	2.16	2.89	2.70	3.00	5.70	3.24
D	血液及び造血器疾患	1	血液及び造血器の疾患											
			小計		0.04	0.41		0.41	0.22	0.22				0.16
E	精神及び神経病の異常	1	精神病											
		2	精神神経症											
		3	性格行動及び知能の異常											
			小計		0.04	0.14		0.10	0.07			0.12		0.06
F	神経及び感覚器の疾患	1	中枢神経系の血管損傷											
		2	その他の神経系の疾患											
		3	視器の疾患											
		4	聴器の疾患											
			小計	6.51	8.34	11.60	16.71	8.06	3.74	10.22	8.46	6.57	13.90	8.56
G	循環器系の疾患	1	リユウマチ熱											
		2	慢性リユウマチ性心臓疾患											
		3	動脈硬化性及び変性心臓疾患											
		4	その他の心臓の疾患											
		5	高血圧性疾患											
		6	動脈の疾患											
		7	静脈の疾患及びその他の循環器系の疾患											
			小計	1.71	1.72	1.80	0.24	2.26	2.34	1.28	1.13	1.73	0.89	1.65
H	呼吸器系の疾患	1	急性上気道感染											
		2	インフルエンザ											
		3	肺炎											
		4	気管支炎											
		5	その他の呼吸器系の疾患											
			小計	22.84	25.62	29.14	17.85	24.78	17.27	18.00	27.95	25.14	24.24	24.90
I	消化器系の疾患	1	口腔及び食道の疾患											
		2	胃及び十二指腸の疾患											
		3	虫垂炎											
		4	ヘルニア											
		5	その他の腸及び腹腔の疾患											
		6	肝臓、胆嚢及び膵臓の疾患											
			小計	30.59	27.26	20.58	27.36	20.99	28.05	19.78	22.75	22.49	24.42	25.02
J	性の尿器系の疾患	1	腎炎及びネフローゼ											
		2	その他の泌尿器系の疾患											
		3	男性々器の疾患											
			小計	0.73	0.13	0.55		0.41	0.22	0.44	0.90	0.35		0.44
K	皮膚及び皮下組織の感染及び結合組織疾患	1	皮膚及び皮下組織の感染											
		2	その他の皮膚及び皮下組織の感染											
			小計	4.64	4.52	3.31	1.94	4.37	9.45	6.89	5.18	6.11	3.03	5.25
L	骨及び運動器の疾患	1	関節炎及びリウマチ（リウマチ熱を除く）											
		2	骨髄炎及びその他の骨、関節の疾患											
		3	その他の筋骨格系の疾患											
			小計	2.69	2.29	1.93	1.45	2.21	4.17	2.22	4.05	5.31	2.85	2.87
M	症状及び老衰の不明確な診断名	1	系統又は器官に関する原因不詳の症状											
		2	老衰及び診断名不適当の状態											
		3	不明											
			小計	3.99	2.86	4.42	0.24	2.00	6.03	4.22	1.58	1.85	3.74	3.22
N	不慮の事故・中毒及び暴力の災害	1	骨折											
		2	骨折を伴わない関節脱臼											
		3	関節の捻挫及び隣接筋の筋違い											
		4	内臓の損傷（骨折を除く）											
		5	裂傷及び開放創											
		6	表在損傷ならびに皮膚表面に損傷のない挫傷及び破砕											
		7	異物侵入											
		8	熱傷											
		9	毒物の作用											
		10	その他及び詳細不明の外因の作用											
			小計	8.93	12.29	12.93	18.85	13.44	10.27	16.22	13.06	17.07	8.38	12.67
疾病合計				90.07	87.71	87.57	80.15	86.56	89.73	83.78	86.94	82.93	91.62	87.33
総合計				100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

の疾患ではオーストライア航路に多く，呼吸器系の病気もオーストラリア航路に多い傾向がみられる。消化器系の病気では世界一周および中近東航路に多く，性尿器系の病気では世界一周およびカルカッタ航路に多い。皮膚病は中近東航路に特に多く，骨および運動器の疾患ではオーストラリア航路に多い。災害ではオーストラリア航路と南米西岸に多発の傾向がみとめられる。

次に航路別傷病発生状況を病類別の構成でみると，表3の通りである。伝染病および寄生虫病でみると，欧州航路が第一位であり，新生物では，印・パ航路が第一位である。アレルギー栄養の疾患では，黒海が第一位であり，血液・造血器の疾患では中南米および欧州航路における比率が高い。精神病・精神神経症では中南米，神経系，感覚器の疾患では南米西岸航路の比率が非常に高い。循環器の疾患では欧州航路，呼吸器の疾患ではカルカッタおよび西廻一周航路における比率が高い。

消化器系の病気では欧州航路の構成比率が第一位であり，性尿器系の病気ではカルカッタ航路に高い。皮膚病では中近東で，骨および運動器の疾患ではオーストラリア航路における比率が高い。災害では南米西岸が第一位で全体の傷病のほぼ20%がけがによって占められている。

別の会社について，航路別に1,000人1日当りの船内傷病発生状況をみると表4の通りである。これは1962年における1年間の資料である。南アフリカ航路の10.62件を最高として東

表4　病類別船内傷病発生件数（1962年　某社）件/1,000/1日

航路名	太平洋ガルフ	オーストラリア	ニューヨーク	欧州	西航南米	南アフリカ	東アフリカ	西アフリカ	印・パ	東航南米	合計又平均
期間	36.12～37.10	37.2～38.1	36.8～37.8	37.8～38.9	37.4～38.2	38.3～38.8	36.9～37.9	38.3～38.10	36.9～37.12	37.3～38.4	36.8～38.10
船内診療所受診件数											
A 伝染病及寄生虫	0.07	0.02	3.03	0.02		0.06	0.23	0.48	0.54		0.02
C アレルギー性疾患内分泌系疾患・物質代謝栄養疾患	0.12	0.04		0.24		0.61	0.02		0.18	0.22	0.13
F 神経系及感覚器の疾患	1.05	0.90	0.47	0.42	1.03	1.27	0.38	1.01	0.69	0.59	0.73
G 循環器系の疾患	0.07	0.02	0.04	0.12	0.10	0.51	0.16		0.22	0.10	0.12
H 呼吸器系の疾患	1.37	0.60	0.79	0.60	1.63	2.03	1.31	1.07	1.73	2.76	1.58
I 消化器系の疾患	0.97	0.95	0.86	1.54	2.01	2.49	1.04	1.79	1.36	2.08	1.47
J 性尿器系の疾患	0.10	0.11	0.11	0.04	0.31	0.20	0.02			0.01	0.07
K 皮膚及疎性結合組織の疾患	1.27	0.49	0.67	0.89	0.76	1.07	0.02	0.66	0.27	0.72	0.66
L 骨及運動器の疾患	0.05	0.06	0.04	0.36	0.14	0.36	0.34	0.71	0.76		0.26
M その他	0.27	0.16	0.04	0.34		0.41	0.09		0.04	0.28	0.17
N 不慮の事故中毒及暴力	1.20	0.60	0.39	2.00	0.53	0.41	0.18	0.30	1.75	1.48	1.10
合計	6.55	3.96	3.43	7.52	6.50	10.62	3.96	6.02	7.55	8.24	6.66
Nを除いた場合	5.35	3.36	3.04	5.58	5.98	10.21	3.78	5.72	5.80	6.76	5.56

航南米，欧州，印・パ，太平洋ガルフ，西航南米，西アフリカ，オーストラリア，東アフリカ，ニューヨークという順位になっている。

これを病類別によると，南アフリカ航路では消化器系の病気がもっとも多く，東航南米では呼吸器系の病気，欧州では消化器系の病気，印・パでは災害，太平洋ガルフでは呼吸器系の病気，西航南米では消化器系の病気，西アフリカは消化器系の病気，オーストラリアでは消化器系の病気，東アフリカでは呼吸器系の病気，ニューヨークでは消化器系の病気がそれぞれ第一位を占めている。

更に同じ資料で各部別にみると表5の通りである。職員，甲板部，機関部とも南アフリカ航路に最高で，ニューヨーク航路に最低を示しているが，事務部だけは，東アフリカ航路で最低になっている。航路別にみていくと，南アフリカ航路では事務部が最高で甲板部が最低，東航南米では機関部が最低，印パでは事務部が最高で機関部が最低，太平洋ガルフでは職員が最高で甲板部が最低，西航南米では機関部が最高で職員が最低，西アフリカでは甲板部が最高で事務部が最低，東アフリカでは職員が最高で事務部が最低，オーストラリアでは事務部が最高で甲板部が最低，ニューヨークでは事務部が最高で機関部が最低となっている。

以上の通り航路別の比較はいろいろの要因が重なり合っているので，更にくわしく検討を加えなければ，実態を明かにすることは困難である。

表 5　航路別職部別船内傷病発生件数と体重の増減（1962年　某社）

	太平洋ガルフ	オーストラリア	ニューヨーク	欧州	西航南米	南アフリカ	東アフリカ	西アフリカ	印・パ	東航南米	合計又平均
各部別受診率 件/1,000名/1日											
職員	7.60	3.77	3.59	7.02	5.24	9.94	4.30	6.22	7.07	6.24	5.36
甲板部	5.28	3.68	3.19	6.09	7.23	8.84	4.03	6.98	7.63	7.31	5.92
機関部	6.17	4.26	2.76	6.86	7.40	10.91	4.03	4.95	6.01	10.29	6.15
事務部	7.36	4.27	4.84	13.16	6.39	15.52	2.82	5.61	11.63	8.71	8.26
平均	6.55	3.96	3.43	7.58	6.50	10.62	3.96	6.02	7.55	8.24	6.53
体重増減 kg/10,000/1名											
職員	+0.08	−0.59	−0.20	−0.81	−2.57	+1.96	+0.42	−3.11	−0.99	−1.60	−0.72
甲板部	−0.81	−0.18	−0.24	−2.89	−8.82	−2.36	0	−2.70	−1.52	−1.29	−1.57
機関部	−0.34	+0.19	−0.13	−1.24	+0.75	+0.11	+0.69	−1.88	−0.96	+0.76	−0.18
事務部	−0.31	+0.61	−0.10	−1.11	+1.37	+2.22	−1.41	0	−1.65	+0.06	−0.13
平均	−0.34	−0.06	−0.18	−1.50	−2.84	+0.33	+0.14	−2.26	−1.23	−0.39	−.069

3.　医療無線電報の実態

医療無線電報の取扱状況を，日本海員掖済会の取扱数によってみると表1の通りで，年々増加の傾向がいちぢるしい。医療無線電報はこの他に船員保険病院，各基地漁業無線等で扱っているものがあるので，実際の取扱数はこれよりかなり多いと思われる。

1962年における医療無線電報の内容を病類別に分類すると表2の通りである。もっとも多いのが消化器系の疾患の40.9%であるが，これに

表 1　医療無線電報の取扱数の推移

年度別 ＼ 内外国船 隻数，通数	日本船		外国船		計	
	隻数	通数	隻数	通数	隻数	通数
1958	143	500	23	105	166	605
1959	184	631	24	63	208	694
1960	203	791	29	92	232	883
1961	273	1,024	74	221	347	1,245
1962	353	1,224	53	163	406	1,387

表 2　医療無線電報の病類別，内外国別，取扱状況（1962年）

病類別		日本船		外国船		計	
		人員数	%	人員数	%	人員数	%
伝染病及び寄生虫病	結核						
	性病			1	1.9	1	0.3
	その他の伝染病及び寄生虫病	11	3.1			11	2.7
新生物		4	1.1			4	1.0
アレルギー分泌物質代謝及び栄養の疾患血液及び造血器の疾患		6	1.7			6	1.5
精神病，精神神経症及び人格異常神経系及び感覚器の疾患		47	13.3	5	9.4	52	12.8
循環器系の疾患		16	4.5	6	11.3	22	5.4
呼吸器系の疾患		27	7.6	6	11.3	33	8.1
消化器系の疾患		149	42.2	17	32.1	166	40.9
性尿器系の疾患		29	8.2	4	7.5	33	8.1
皮膚及び疎性結合組織の疾患		14	4.0	1	1.9	15	3.7
骨及び運動器の疾患		6	1.7			6	1.5
分娩，妊婦の疾患				2	3.8	2	0.5
症状老衰及び診療名不適当の疾患		2	0.6			2	0.5
災害	骨折	8	2.3			8	2.0
	脱臼，捻挫	5	1.4	1	1.9	6	1.5
	裂傷及び開放創 表在損傷ならびに皮膚表面は損傷のない挫傷及び破砕	7	2.0	5	9.4	12	3.0
	その他の外傷	22	6.2	5	9.4	27	6.7
合計		353	100.0	53	100.0	406	100.0
総通数		1,224		163		387	

次いで精神病，精神神経症および人格異常が12.8％の高率を示していることは注目に値する。精神障害に対する問題がこれからの大きな課題である。

医療電報の内容を指示事項別に分類すると表3の通りである。症状に応じて投薬を指示したものが29％で第一位を占め，注射・安静・食事の指示等の順序になっている。

次に応答所要時間についてみると，15分以内の即答といえるものが35％で，1時間以内が24

表 3　医療電報による指示事項（1962年）

指示事項	日本船		外国船		計	
	件数	%	件数	%	件数	%
症状に応じて投薬を指示したもの	367	29.1	59	30.3	426	29.2
緊急処置として注射を指示したもの	186	14.7	26	13.3	212	14.6
傷面消毒薬剤貼布等の処置を指示したもの	56	4.4	5	2.6	61	4.2
マッサージ，湿浴を指示したもの	1	0.1	1	0.5	2	0.1
経過監察を指示したもの	57	4.5	3	1.5	60	4.1
応急置として副木，固定，繃帯，止血等を指示したもの	32	2.5	5	2.6	37	2.5
氷のう，含嗽，冷・湿罨法等を指示したもの	78	6.2	8	4.1	86	5.9
湿布，洗眼，点眼等を指示したもの	97	7.7	18	9.2	115	7.9
浣腸，洗滌，導尿等を指示したもの	32	2.5	1	0.5	33	2.3
緊急処置として小切開排膿異物摘出等を指示したもの	4	0.3			4	0.3
絶食，粥食等食事内容を指示したもの	156	12.4	14	7.2	170	11.7
安静，臥床，換気等を指示したもの	148	11.7	44	22.6	192	13.2
人口呼吸，酸素吸入等を指示したもの	3	0.2	2	1.0	5	0.3
重患のため応急処置をなし急遽最寄港へ入港を指示したもの	45	3.6	9	4.6	54	3.7
計	1,262	100.0	195	100.0	1,457	100.0

表 4　医療無線電報応答所要時間（1962年）

所要時間別	日本船		外国船		計	
	件数	%	件数	%	件数	%
15分以内	220	39.8	2	2.5	222	35.1
30分以内	86	15.6	9	11.4	95	15.0
45分以内	61	11.0	8	10.1	69	10.9
1時間以内	123	22.2	30	38.0	153	24.2
1時間30分以内	36	6.5	21	26.6	57	9.0
1時間30分以上	27	4.9	9	11.4	36	5.7
計	553	7.9	79	100.0	632	100.0

%，1時間以上を要したものがほぼ15%ある。外国船の方が日本船に比べて時間が長くかかっている傾向がみられる。言葉のちがいによるものであろうか。